

南九州の古道について2

～古道と中近世牧の立地～

上村俊洋

はじめに

平成29年度黎明館学芸講座⁽¹⁾と、それを踏まえた同30年度調査研究報告⁽²⁾において、鹿児島県の古代駅路の概要について、筆者なりに研究史を整理して、若干の私見を述べた。調査研究報告においては、中近世牧⁽³⁾及び中世城館⁽⁴⁾の立地を、古代以来の交通路を検討する材料に適用できる可能性がないか触れた。本稿は、文献史料から知られる鹿児島県内の中近世牧の立地と古代の交通路⁽⁵⁾を検討する試論である。

第1章 古代南九州の牧関連文献史料

古代の薩摩・大隅両国の牧関連資料は少ない。

『日本書紀』推古天皇20(612)年春正月辛巳朔丁亥(7日)条では
宇摩奈羅摩。辟武伽能古摩。

とあり、「ひむか」が日向国域を指すか不明であるが、後の薩摩・大隅国域が日向国に含まれたとしても、隼人の朝貢以前の段階では、薩摩・大隅国域は該当しない可能性が高い。

『続日本紀』文武天皇4(700)年3月丙寅(17日)条では

令下諸国定二牧地一放牛馬上。

とあり、建国まで間もなくの薩摩・大隅国域は日向国域内で牧が設置された可能性もある。

『日本三代実録』貞観2(860)年10月8日甲申条では

廢二大隅國吉多。野神二牧一。緣三馬多蕃息害二百姓之作業一也。

とあって、大隅国内の二牧が廃止されている。ここでは、「百姓之作業」に害をなすほど馬が多く繁殖している、としており、牧の立地は古代集落から隔絶した存在ではない。

吉多牧は、古代には大隅国に属する、後の鹿児島郡吉田郷や、比定地未詳の大隅郡岐刀郷(『倭名類聚抄』)、始良市北町(『三国名勝図会』)等が比定候補となる。吉田郷には、近世重富島津家領高牧野がある。吉田郷と始良市北町は、藤岡謙二郎氏が想定⁽⁶⁾

し、始良市教育委員会が発掘調査⁽⁷⁾で絞り込んだ蒲生駅-大隅国府間の古代駅路を南北に挟む立地となる。

野神牧は、日向国野波野牧(『延喜式』兵部省)、始良市始良町甌村北山牧(『三国名勝図会』)との関連が比定される。しかし、「野神」地名を素直にとると、志布志市有明町野神がある。有明町野神は、中世以降は日向国諸県郡に属するが、『大隅国風土記逸文』所引の海村的な「必志村」を大崎町菱田に比定し、遺称地が失われた大隅国大隅郡大隅郷が日向国諸県郡「救仁郷」・「救仁院」に改編されたとすれば、古代には大隅国に属する⁽⁸⁾と考える。

『延喜式』卷第28兵部省(諸国馬牛牧)では、薩摩・大隅両国の牧は記載されず、日向国に野波野馬牧と野波野牛牧が見える。860年の二牧廃止によって大隅国には牧が皆無となった理解もできる。また、前述の大隅国大隅郡大隅郷が、この段階までに日向国諸県郡救仁郷・救仁院に改編されたとすれば、860年に廃止された大隅国野神牧を、日向国の野波野牧として再開したと考えることもできる。もちろん、野神牧と野波野牧が無縁であることも考えられる。

薩摩・大隅両国域の古代牧の存在自体が不明な一方で、『延喜式』卷第26主税上(馭馬直法)では、大隅・薩摩・日向3国の馭馬の価として

上馬四百束。中馬三百束。下馬二百束。

と、全国で24位級の価格が示されており、馬の売買を前提としている。また、承平4(934)年7月17日乙卯条(『日本紀略』後編二)では、

薩摩国進唐馬一匹。

とあるが、輸入・育成等の来歴は不明である。

『倭名類聚抄』に見える薩摩・大隅国域の古代地名は未詳地が多く、史料が少ないことと相まって、両国域の古代牧は不明な点が多い。

第2章 古代駅路と中近世牧

第1節 近世藩営牧分布から気づいたこと

平成30年度黎明館企画展「遺跡でたどる幕末・明治の鹿児島」において、同企画展を筆者と共同担当

第1表：南九州の中近世牧一覧（主要参考文献：鹿児島県史、市町村史誌、三国名勝図会、鹿児島県の地名）

国郡	牧	古代	鎌倉時代	南北朝～戦国	戦国島津氏	近世○藩営	比定地案	
肥後	葦北	長島野			慶長4年2月7日付島津忠恒捷書に「如前々」	○	長島町川床	
		大嶽野 国見野					長島町下山門野	
薩摩	出水	出水野				○	出水市矢管岳山麓？	
		瀬崎野 阿久根野		伝・本田貞親開設		○江戸期廃止	阿久根市脇本笠山山麓 阿久根市赤瀬川牧之内	
高城	高城	網津野					薩摩川内市網津	
		寄田野			島津師久時代	○	薩摩川内市高江	
薩摩	薩摩	笠山野				○野間から移転	薩摩川内市東郷町	
		九尾野 長野		祁谷院氏の牧	歳久の牧 義久・義弘時代	宮之城島津牧 入来院氏の牧	さつま町宮之城屋地 薩摩川内市入来長野	
鹿島	鹿島	市山野				○	薩摩川内市上飯里	
		下飯野				○明和期廃止	薩摩川内市下飯手打	
日置	日置	市来野		島津氏久時代	義久馬遣	○	いちき串木野市	
		春山野		島津勝久時代	義弘書状	江戸中期廃止	鹿児島市松元町春山	
伊作	伊作	伊作野			忠良時代復興	○	日置市吹上和田	
		野間御崎野 鹿籠牧				○笠山野へ移転 喜入氏牧	南さつま市笠沙片浦 枕崎市箇見嶽	
額娃	額娃	嶽ノ腰 額娃野			島津氏久時代		南九州市額娃？	
		唐松野 池田牧				○明和期農地化	南九州市額娃上別府新牧	
給黎	給黎	喜入野			貴久時代	喜入肝付氏牧	鹿児島市喜入町一倉	
		前洲			島津氏久時代			
鹿島	鹿島	比志島野			貴久時代	○外来種育成	鹿児島市皆与志町	
		大瀬多尾 吉野馬牧		島津氏久時代 川上親久開設	貴久時代	○	鹿児島市吉野町？ 鹿児島市吉野町	
大隅	大隅	菱刈野	杵垣女				伊佐市菱刈町馬越？	
		沢原野				○寛永年間廃止	湧水町吉松沢野？	
大隅	大隅	高牧野				重富島津家牧	鹿児島市吉田町	
		吉多牧	日本三代実録廃止					
大隅	大隅	北山牧	野神牧？				始良市始良町北山	
		北野	吉多牧？				始良市北野	
大隅	大隅	青色野			蒲生氏の牧	○	始良市蒲生町米丸	
		西別府牧			義弘愛馬産地		始良市治治木町西別府	
大隅	大隅	春山野			義久・義弘時代	○	霧島市国分重久	
		平野			義久・義弘時代		霧島市国分清水	
大隅	大隅	福山野			天正8年開設	○安永噴火後一部廃止	霧島市福山牧の原	
		末吉野				○烏帽子野から移転	曾於市大隅町中之内	
大隅	大隅	嶽ノ牧			朝鮮役後放牧		鹿児島市桜島町武	
		牧馬野				垂水島津家牧	垂水市牧	
大隅	大隅	野神牧	日本三代実録廃止				志布志市野神？	
		烏帽子野			義久・義弘時代	末吉野へ移転	志布志市笠紙山山麓	
大隅	大隅	鹿屋高牧野			肝付氏の牧	朝鮮役後放牧	○	鹿屋市高牧町
		検見崎牧			肝付氏の牧			肝付町？
大隅	大隅	中牧			肝付氏の牧		肝付町？	
		高崇寺牧			肝付氏の牧		肝付町？	
大隅	大隅	小根占高牧			祢藏氏の牧		南大隅町根占？	
		立日野				○元禄期開設	南大隅町佐多伊座敷	
大隅	大隅	塩屋牧			島津貞久時代			
		馬毛島牧			種子島氏の牧	貴久代アラビア種		西之表市馬毛島
大隅	大隅	藤野				種子島家牧	西之表市安城	
		大崎野				種子島家牧	西之表市安城	
大隅	大隅	大峯野				種子島家牧	西之表市住吉	
		本増野				種子島家牧	中種子町野間	
大隅	大隅	大町野				種子島家牧	由久村	
		崎来野牧				種子島家牧	南種子町野間	
大隅	大隅	御崎野牧				種子島家牧	南種子町西之	
		牟礼野				都城島津家牧	都城市西嶽	
日向	諸原	佐野高原			島津氏久時代			
		浦之牧				寛永期廃止	えびの市	

※国郡所属は古代郡郷制改編以前段階で想定される範囲

※網掛けは古代または中世に由来する可能性を持つ牧

した黒川忠広氏は藩営牧について紹介した。薩摩藩領最大の福山野（霧島市福山牧之原）は、錦江湾岸の式内社宮之浦神社から始良カルデラ外輪山を登った先にあり、近隣には古代駅路関連小字「大人形」や中世廻城跡が所在する。これは、国道10号亀割バイパス開通以前の古代～近代における同地域の主要交通路であり、藤岡氏はここに大隅国府－日向国府を結ぶ古代駅路を比定した。

筆者は、古代駅路と福山野が重なることについては単なる偶然と捉えていた。しかし、企画展で取り上げた藩営牧の一つに「春山野」（霧島市国分重久付近）があることから、他の中近世牧の立地についても関心をもつに至った。なお、「春山野」は鹿児島市松元町にも江戸中期に廃絶した牧があるが、ここでは霧島市の牧をとりあげる。

春山野は、霧島市国分－曾於市財部－宮崎県都市を結ぶ県道2号線の沿線に所在した藩営牧である。県道2号線は、「長門本平家物語」記載の俊寛僧都流刑経路に沿っており、平安末時点では公的な交通路として利用⁽⁹⁾されていた。

第2節 藤岡謙二郎氏想定駅路付近の中近世牧

藤岡氏が想定する古代駅路近隣に比定される牧としては、以下の諸牧がある。なお、諸牧の概要は「第1表：南九州の中近世牧一覧」を、また牧の比定地及び想定される古代交通路等は後掲「分布地図」を参照されたい。

鳥津忠久時代に薩摩入国当時に設定されたとの伝承を持つ出水野は、出水市矢筈岳山麓に所在したとされる藩営牧である。古代駅路は、肥後国水俣駅から現在の国道3号線及び鹿児島本線同様に沿岸から矢筈岳西麓に沿って出水平野東端を南下する経路と、水俣駅から南南東に下り湯の鶴、矢筈峠を経て矢筈岳東麓を南下する経路があり、出水市武本付近で合流すると考えられる。

藩営牧の瀬崎野は、出水市武本付近から鹿児島本線に沿って旧高尾野及び旧野田の各麓付近を経て阿久根に至る出水平野南側を通ると想定される古代駅路から北にそれるが、近隣の阿久根市笠山から出水市境に所在した。

上記の古代和泉郡から南下した駅路は高城郡の薩摩国府近郊から川内川を渡って東向し、薩摩郡田尻駅、同櫛野駅を経て大隅国蒲生駅に至る。櫛野駅と蒲生駅の間には、入来院家領の長野牧がある。蒲生駅近隣では、始良市柳ヶ迫遺跡・城ヶ崎遺跡・外園遺跡の発掘調査によって比定された古代駅路⁽¹⁰⁾

の北方の米丸マールに、中世蒲生氏の牧で、近世藩営牧の青色野が所在した。

この古代駅路は、大隅国府を経て日向国府を目指し、その途上に前述の福山野がある。

また、日向国府から肥後国府に向けて、現在の国道268号線を野尻、小林を経てえびのに至る駅路沿線では、えびの市草刈田遺跡で道路痕跡⁽¹¹⁾が検出されており、えびの高原北麓に浦之牧、えびの高原西麓の湧水町域に沢原野が比定される。

第3節 諸氏想定駅路近隣の中近世牧

前述のえびの市を経る経路は、天承2（1132）年7月21日付僧経覚解⁽¹²⁾から読み取れる鳥津本庄－眞幸院－牛屎院－和泉郡を通る鳥津庄内貢納経路に重なる。

小園公夫氏が「長門本平家物語」から指摘した現県道2号線の古代交通路近隣には、前述の春山野が所在した。

武部健一氏は、薩摩郡櫛野駅から東北向してさつま町宮之城付近に高来駅を、さらに東北向して伊佐市菱刈に大隅国菱刈郡大水郷の大水駅を比定⁽¹³⁾した。この想定経路上には、中世邨答院氏領及び戦国末期鳥津歳久領、近世宮之城鳥津家領の九尾野の私牧が比定される。

第4節 武久義彦氏想定駅路近隣の古代牧

正暦元（990）年以降に成立したと考えられる作者未詳「檜垣媼集」は、藤原興範（911～916年頃大式在任）や、その後の小野好古（968年没）、清原元輔（990年没）などの大宰府高官や肥後国司等と、西海道の女性歌人である檜垣女⁽¹⁴⁾が交わしたとされる歌が掲載されている。「地誌備考 五」（『鹿児島県史料』旧記雑録拾遺）の菱刈郡の項では、次のように引用している。

〔名勝考〕

菱刈野 この菱刈野ハ今湯尾に其墟ありといへり

檜垣集、おほすミさつまのなかにひしかりのいまはちかうとよみしに、

春のこまをうち出してみれハ秋さひしかりのはいまはちかうありける

たかゝひといへハいつくと道とひしかり野はいまはちかくならすや

むかし馬越の上に沢原野牧あり、何れの世より置れけん、履歴をしらす、其馬曾て人に馴す、よて享保中に罷られしなり、菱刈野に春の駒を

詠ミ、又馬越の名など、その由あるに似たり、
〔地理纂考〕

菱刈野 當郡の内にあるへきなれとも、今其所を審にせず、水戸光圀の扶桑拾葉集に、菱刈野と云こと檜垣女か家の集に出たるよし見えたり、檜垣女の事ハ出水の巻にいへり、大隅薩摩のなかにひしかりのいまはちかうとありて、以下の數字分明ならず、

檜垣女

春の駒をうち出してみれハ燦さひしかりのは今ハちかうありけり

たかゝりといへはいつくと道とひしかりのは今はちかうならずや

此歌の題書によれば、此野は同郡の内にありしなるへし、或人菱刈野ハ旧湯之尾なりといへり、今菱刈郷なり、又白尾國柱曰、昔し馬越の上に**澤原野牧**あり、其馬曾て人に馴す、よりにて享保中に罷られしとぞ、菱刈野に春の駒とよミ、又馬越などいへる名、其由あるに似たりといへり、澤原野ハ隣郷吉松にありて、馬越にハさる所なし

として、伊佐市菱刈に菱刈野、湧水町吉松に沢原野が想定される。私見では、古代大隅国菱刈郡四郷は、現伊佐市の旧大口市及び旧菱刈町と、現湧水町の旧吉松町及び旧栗野町の旧4市町域に相当すると考えており、菱刈野及び沢原野は共に古代菱刈郡域にあたる⁽¹⁵⁾。

武久義彦氏は、大隅国府から大隅正八幡宮及び石鉢社を経て溝辺台地、横川、栗野、菱刈、大口⁽¹⁶⁾を経て、水俣市久木野仁王近隣に比定される仁主駅に通じる古代駅路を想定⁽¹⁷⁾された。また、平田信芳氏は、菱刈町大峰遺跡の地を、菱刈郡大水郷及び大水駅と関連する可能性を指摘⁽¹⁸⁾された。黒川氏は、赤色高台を有する黒色土器の出土分布状況から、同土器が、9世紀頃の菱刈郡を中心に搬出されたのではないかと⁽¹⁹⁾とされた。その分布状況は、想定される古代交通路上に点在⁽²⁰⁾している。また前述の1132年段階の島津庄内貢納経路も近い。菱刈野及び沢原野が10世紀に牧として実在したならば、古代菱刈郡域において、古代駅路等の交通路近隣に所在したと考える。

第5節 古代駅と中世牧の名称一致例

出水地方を対象とした慶長4（1599）年2月7日付島津忠恒宛書（『島津家文書』1519）には、

瀬さき野・いつミ野・あく祢野・なが嶋野・網

津野牧之事、如前々これを取りたつへきの条、野馬あら俱あた類間敷候、可令馳走事と五つの牧が取り上げられている。

このうち、「あく祢野」は『延喜式』に見える「英祢」駅と、「網津野」は「網津」駅と地名が一致する。また、「いつミ野」は前述の通り想定される古代駅路に近接し、付近に「市来」駅が所在する⁽²¹⁾。

「瀬さき野」は、前述の通り古代駅路から若干北方に離れる。瀬崎野が所在する笠山は、北方に葦北方面の海を控え、西方の黒瀬戸を挟んだ長島からは天草地方に通じる。笠山の南東には、島津氏初代忠久が、伝承上は薩摩入国の拠点としたとされる木牟礼城が所在する。島津氏当主の実際の入国は、元寇に伴い博多に下向した忠宗代の碓山城守護所入府の可能性⁽²²⁾もあるが、5代貞久以降が確実とされる。木牟礼城には島津氏初期からの家臣本田氏が在城し、薩摩守護島津氏の統治拠点の一つとなっていた。現在の国道3号線を挟んだ木牟礼城南方の中郡遺跡群は、中世前期の遺構・遺物を伴う屋敷地⁽²³⁾であり、木牟礼城や島津氏統治との関連が考えられる。想定される古代駅路からは中郡遺跡群を挟むことで木牟礼城も駅路との立地を意識した可能性がある。本田氏時代の創設の伝承を持つ瀬崎野は、木牟礼城・中郡遺跡群を挟んで間接的に駅路と関連すると考える。

古代和泉郡は、薩摩国建国以前から肥後勢力の浸透が想定される。薩摩建国以前の和泉郡の古代交通を肥後国中心に考えて、肥後国水俣－出水－肥後国長島－肥後国天草を経る交通網が存在した可能性を考慮すると、長島野もその沿線に所在する。阿久根市笠山麓や長島には、肥後国府－薩摩国府を結ぶ駅路から外れた地域に「馬籠」等の小字が見られ、牧関連地名とも考えられるが、長島方面との交通路に因む可能性はないだろうか。

第6節 中近世牧の名残「^{おる}苙」遺称地

藩政時代に九州内でかなりの供給量を誇るほど繁栄した旧薩摩藩領内の牧は、明治以降、牧そのものも、牧に伴う各種風習も失われた。現在、鹿児島市喜入一倉に残る「喜入牧の苙跡」は、喜入領主肝付家の私牧であるが、牧に欠かせない「苙」の形状がよく残る。馬蹄形の土塁を複数、重ねるように廻らし、馬追で追い込んだ馬を大苙、中苙、小苙に仕分けていく施設である。

第2表は、地図等に記載された「苙跡」及び「苙」関連地名を、管見の限りまとめた一覧表であ

る。「苙」関連地名は、失われた牧の比定地を確認する上で好材料となる。

Aの、鹿児島県立図書館所蔵「甕嶋縣實測圖」（陸軍参謀局編）は、西南戦争最中の明治10（1877）年5月、52,500分の1の縮尺のもので、まだ「苙跡」が各地に残る。

Bの「輯製二十万分一図」は、縮尺が大きくなったこともあり、唐松野付近の「苙跡」しか示されていない。大縮尺でも記されるほど、「苙跡」が当時の重要な地名であることがわかる。

Cは、戦後まで随時加筆修正された明治期実測の50,000分の1地形図である。ここでは、縮尺が近いAに見られた伊作野・末吉野の「苙跡」の名残のような「苙」関連地名が記されている。

Dは、現存する「苙」関連地名である。伊作野の「苙岡」は国道270号線上にバス停として見える。「喜入牧の苙」は残存する「苙」形状を鹿児島市指定史跡としている。比志島野跡に残る「喉呂之平」は東西南北の小字に分かれ、鹿児島市史付録に見える鹿児島市皆与志町の地名である。小根占高牧については、南大隅町根占の雄川左岸の丸峰あたりの説があるが、現在の25,000分の1地形図「辺塚」では、根占から佐多に向かう途中の南大隅町辺田に「苙」地名が記載されている。

これら「苙」関連地名から比定する各牧と、各時代の主要交通路との遠近関係をE～Gに示す。Eは

想定される古代駅路との関係で、福山野のみが古代駅路と近接するほか、瀬崎野と末吉野は古代駅路の周辺に存在する。Fは『歴史の道調査報告書』で取り上げられた前近代の主要交通路⁽²⁴⁾（分布地図上の緑色実線、以下「歴史の道」）との関係で、伊作野・穎娃野・吉野牧・福山野・末吉野・小根占高牧が近接し、瀬崎野・市来野・唐松野はその周辺に所在する。Gは現在の主要国道・県道との関係を示し、唐松野・吉野牧以外は、近隣に主要国道・県道が控えている。

おわりに

第1節 出土遺物から見える古道

表1及び分布地図に示した牧の比定地は、各市町村史誌等や明治以降の地形図・小字図等を参考に机上で比定したもので、現地踏査に至っていないが、古代駅路及び「歴史の道」沿線に中近世牧の多くが所在する。

古代駅路及び「歴史の道」沿線では、特徴的な出土遺物が検出されている。

分布地図の▼は、黒川氏が指摘した赤色高台を有する黒色土器の出土分布を示す。前述のとおり、9世紀頃の古代菱刈郡を中心に分布している。

●は、永山修一氏が指摘した厨墨書土器の出土状況である。郡郷等の領域境等で公的な祭祀に用いられたと考えられ、古代駅路以外で多数検出⁽²⁵⁾している。

■は、栗林文夫氏が指摘した中世常滑焼の出土状況である。日向国域では古代駅路上に出土が見られる⁽²⁶⁾ことが指摘されている。

これらの出土遺物は古代駅路から離れた地点での検出も多く、出土地を結ぶことで当時の交通路を復元できる可能性がある。これらの遺物が経路上で多く検出される「歴史の道」は、前近代から古代まで遡る可能性がある。歴史上の主要交通路は、近代的な土木工事技術の発達による経路の直線化等が施されたとしても、その経路は概ね現在の主要国道・県道等に継承された⁽²⁷⁾と思われる。分布地図で明示したこれらの主要道から外れた吉田高牧野付近でも常滑焼が出土しており、同牧付近にも何らかの重要性を持つ交通路が廻っていた⁽²⁸⁾と思われる。

こうした古代駅路や「歴史の道」、及び現在の主要交通路の沿線に中近世牧が所在したことについて、以下の様なイメージをもった。疫病防止等を背景に市街地や人口密集地から離れている現在の畜産牧場と異なり、前近代の貴重な移動・運搬手段に関わる

第2表：「苙」関連地名

牧名称	苙跡		苙関連地名		道沿線		
	A	B	C	D	E	F	G
瀬崎野	苙				△	△	○
笠山野	苙						○
市来野	苙					△	△
伊作野	苙		苙ノ口	苙岡		○	○
穎娃野	苙					○	○
唐松野	苙	苙				△	
喜入野				喜入牧の苙			△
比志島野				喉呂之平			△
吉野牧	苙					○	
高牧野	苙						△
福山野	苙				○	○	○
末吉野	苙		苙迫 / 苙谷 / 苙尻		△	○	○
小根占高牧				苙		○	○

A：陸軍参謀局1877「甕嶋縣實測圖」（1/52,500 鹿児島県立図書館所蔵）記載「苙跡」
 B：参謀本部陸軍部測量局1889「輯製二十万分一図」（平凡社『鹿児島県の地名』付録）記載「苙跡」
 C：明治期地形図（1/50,000）記載苙関連地名
 D：現存地名（地形図・小字図等参照）
 E：○＝古代駅路近接，△＝古代駅路周辺
 F：○＝「歴史の道」近接，△＝「歴史の道」周辺
 G：○＝国道・県道近接，△＝国道・県道周辺

牛馬牧は、今日のカーディーラーの様に、主要交通路に近接して立地したととらえる。

第2節 古代に遡りうる牧

薩摩・大隅両国域の牧のなかで古代牧は、『日本三代実録』貞観2（860）年に廃止された大隅国の吉多牧・野神牧の二カ所が文献上確実に存在したもので、いずれも比定地を定められない。候補地として始良市北山に野神牧、始良市北野に吉多牧があげられ、いずれも想定される蒲生駅付近の古代駅路から距離はあるが、北方に当たる。

それ以外では、10世紀を反映すると思われる「檜垣媼集」に見える菱刈野が牧である場合、大隅国府から横川、栗野、菱刈、大口を経て肥後国仁主駅へ至る古代交通路沿線に存在する。「名勝考」・「地理纂考」が触れる沢原野（湧水町吉松）は寛永年間に廃止された。沢原野は日向国府－肥後国府を結ぶ駅路の眞研駅から大隅国府へ南下する経路の沿線に当たる。菱刈野・沢原野を含む古代菱刈郡の一带は、12世紀前半の島津庄内貢納経路に重なっている。

中世では、島津氏初代忠久の頃に木牟礼城に入城した本田貞親が瀬崎野を開設したと伝承される。出水平野南端を東西に通過する駅路と、中郡遺跡群を挟んだ北方に所在する木牟礼城の北西に控える笠山は、西方の黒瀬戸を越えて長島・天草方面に至り、海陸交通に通じる立地となる。中郡遺跡群は、11世紀前後の畿内系瓦器、特に楠葉型黒色土器Bが県内初出土した遺跡であり、古代末段階から中央との結びつきが考えられる。こうした背景の上で、海陸交通を掌握しやすい木牟礼城・中郡遺跡群に薩摩守護島津氏勢力の拠点が、同時期に背後の笠山麓に瀬崎野が設けられた。

これらは駅路等の古代の交通路が機能していた時代に、近隣に開設された可能性のある牧である。

加えて、慶長4（1599）年2月7日付島津忠恒掟書によれば、これ以前から、前述の瀬崎野、英祢駅・網津駅の駅名と重なる阿久根野・網津野、市来駅や駅路に近接すると思われる出水野、天草方面に通じる長島野が存在しており、どこまで遡るか不明であるが、中世段階の牧としてとらえたい。駅名や駅路と重なる可能性の高い牧については、古代に遡る牧の可能性、あるいは駅制に関連する何らかの施設が活用された可能性はないだろうか。

第3節 まとめ

数少ない古代牧の文献史料と、『三国名勝図会』

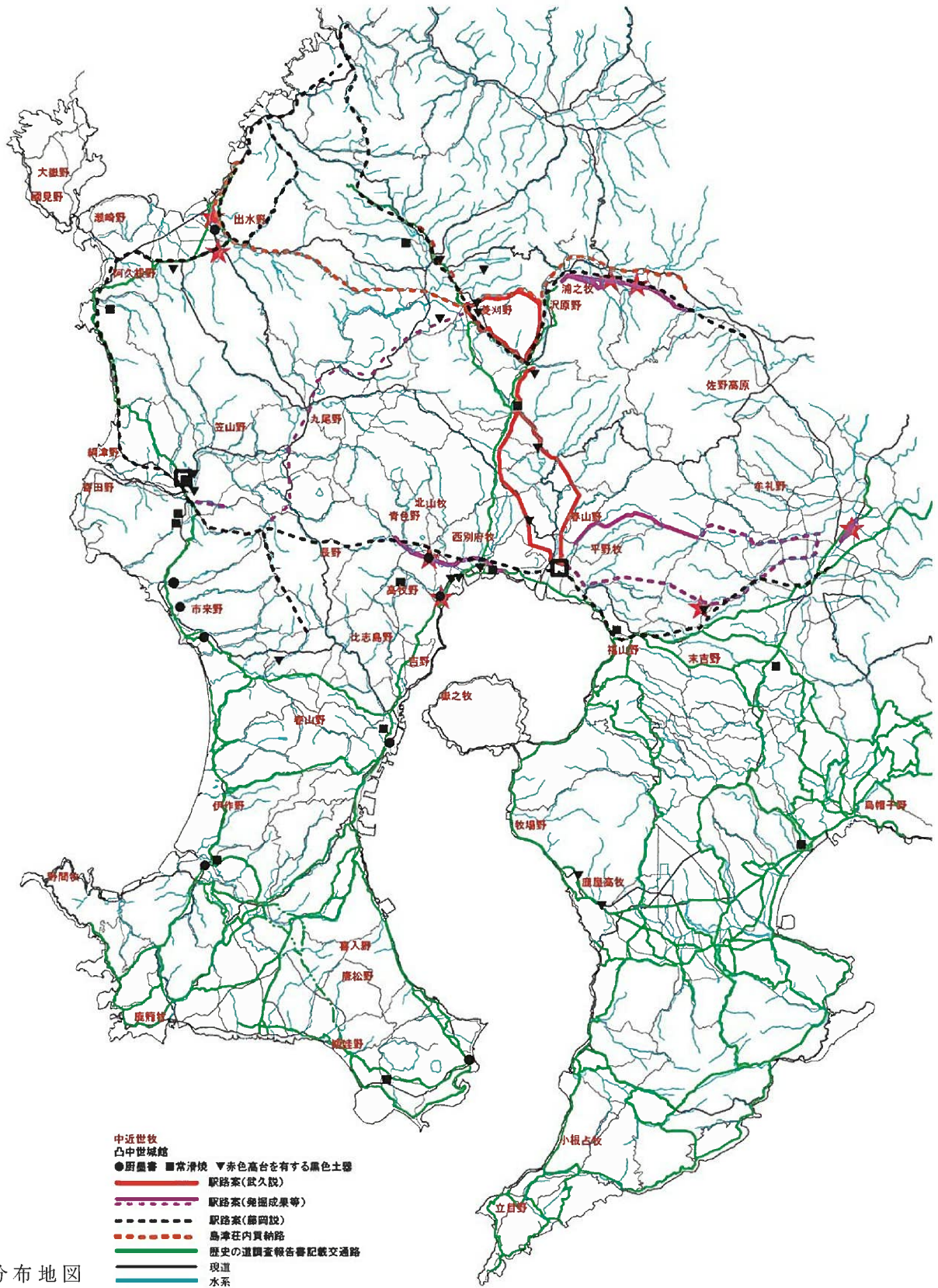
や鹿児島県史、市町村史誌、各種地図・小字図等を参考に中近世牧の立地を、検討してきた。赤色高台を有する黒色土器、厨墨書土器、常滑焼の出土分布がこれらの主要交通路上に見られ、これらの交通路が古代まで遡る可能性がある。牧の大半は、主要国道・県道、遡って「歴史の道」、古代駅路等の沿線に所在していることを確認した。

中近世牧が、古代牧まで遡るとはいえないが、阿久根野・網津野等は英祢駅・網津駅関連施設と何らかの継続性があるかもしれない。

牧の立地と、前述の出土遺物等の分布状況は、歴史的な交通路の復元の材料となると考える。このような視点が有効であれば、他の材料の集成によっても交通路の復元につながる。

本稿では、古代駅路と牧の立地を検討しており、牧の構造・機能・運営方法等については対象としなかった。明治以降、多くの牧は開墾等により、苜の痕跡等も失われており、喜入牧の苜は貴重な史跡である。明治以降の土地開発の手がつかず、形態の残る苜等の牧施設跡について、測量・発掘等の調査が行われれば、牧の構造・機能等についても詳細が理解できるだろう。

筆者の本来の目的である古代駅路については、始良市柳ヶ迫・城ヶ崎・外園遺跡の他は、県内での発掘調査事例は少ない。本稿で取り上げた出水野・市来駅付近の矢筈岳西麓を通る古代駅路に沿う位置で、平成30年度鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターによる六反ヶ丸遺跡発掘調査において、古代相当の古道が検出⁽²⁹⁾されており、発掘調査報告書の刊行が待たれる。



分布地図

註

- (1) 上村俊洋2018「大隅半島北部の古道について～古代菱刈郡を中心に～」(平成29年度黎明館学芸講座)
- (2) 上村2019「南九州の古道について～菱刈郡・大水駅を中心に～」(『黎明館調査研究報告』第31集)
- (3) 牧の概要については、横浜市歴史博物館2019「横浜の野を駆ける～古代東国の馬と牧～」を参照
- (4) 鹿児島県教育委員会(以下、教育委員会は教委と略す)編1987『鹿児島県の中世城館跡～中世城館跡調査報告書～』、鹿児島県考古学会編1994「鹿児島県の中世山城」(『鹿児島考古』第28号)
- (5) 本文で個別に参照する文献以外の古代官道に関する文献として、木下良1983「西海道の古代官道について」(九州歴史資料館編『大宰府古文化論叢』)、永山修一2002「南九州の古代交通」(古代交通研究会『古代交通研究』第12号)、東和幸2010「薩摩川内市の古道跡(予察)」(『黎明館調査研究報告』第23集)を参照した。また、駅制の移動は、上村2001「藤原広嗣の乱における「到着日説」と「合叙説」～『続日本紀』記事の日付の扱いについて～」(鹿児島県高等学校歴史部会編『鹿児島史学』46)で検討した。
- (6) 藤岡謙二郎編1979『古代日本の交通路』I～IV
- (7) 始良市教委編2011「柳ガ迫遺跡」(始良市埋蔵文化財発掘調査報告書(以下、埋蔵文化財発掘調査報告書を埋報と略す)1)、同編2012「城ヶ崎遺跡・外園遺跡」(同埋報3)
- (8) 上村2017「志布志湾岸における古代末～中世前期の領主間交流」(東串良町教委・隼人文化研究会・鹿児島地域史研究会合同シンポジウム「甦る大隅国の実像～古代・中世の志布志湾西岸～」資料集)、同・上床真2018「総括」((公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター(以下、埋文調査センター)編「永吉天神岡遺跡3 第2地点-2 古代・中世・近世編」第6章、同センター埋報17)
- (9) 小園公夫1991「大隅国府と日向国嶋津駅との古代官道について」(『鹿児島史学』39)
- (10) 深野信之2012「大隅国桑原郡における奈良・平安時代の一様相～鹿児島県始良市船津「春花地区遺跡群」の調査成果から～」(『鹿児島考古』42)
- (11) えびの市教委編2004「草刈田遺跡」(えびの市埋報39)
- (12) 『平安遺文』巻五2227
- (13) 武部健一2005『完全踏査 続 古代の道』
- (14) 『国史大事典』
- (15) 上村2007「古代」(『菱刈町郷土誌 改訂版』第三編)。古代菱刈郡建郡については、中村明蔵1978「大隅国菱刈郡の成立をめぐる隼人農耕論(一)」(隼人文化研究会編『隼人文化』4)、永山修一1982「天平勝宝7年菱刈建郡記事の周辺」(隼人文化研究会編『隼人文化』10)、本蔵久三1990「菱刈郡の建郡(天平勝宝7年5月)と岡野須恵器古窯跡群(菱刈町)考」(『鹿児島考古』24)の先学がある。
- (16) 鹿児島県立埋蔵文化財センター(以下、県埋セと略す)編2017「里町遺跡」(同埋報191)
- (17) 武久義彦1994「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」(奈良女子大学文学部『研究年報』38)
- (18) 菱刈町教委編2005「大峰遺跡・北山遺跡」(菱刈町埋報8)、平田信芳他2006「大隅・薩摩の古代官道」(『地名研究会報』93)
- (19) 黒川忠広2006「赤色高台を有する黒色土器」(大河同人編『大河』第8号)
- (20) 上村2019「南九州の古道について2～中近世遺跡から探る～」(令和元年度黎明館学芸講座)
- (21) 出水市域の古道関係発掘調査では、同市教委編1995「市来遺跡・老神遺跡」(出水市埋報4)
- (22) 江平望1996「薩摩国守護所はどこにあったか」(同氏『島津忠久とその周辺』、初出『知覧文化』31号、1994年)
- (23) 埋文調査センター編2014「中郡遺跡群」(同埋報1)
- (24) 鹿児島県教委編1993～1997『歴史の道調査報告書』第一集「出水筋」・第二集「大口筋・加久藤筋・日向筋」・第四集「南薩地域の道筋」・第五集「大隅地域の道筋」
- (25) 永山修一2009『隼人と古代日本』
- (26) 栗林文夫1996「鹿児島県出土の備前焼・常滑焼・東播系須恵器について」(大河同人編『大河』第6号)
- (27) 上村2018「遺跡でたどる幕末・明治の鹿児島」(平成30年度黎明館学芸講座・企画展解説講座)
- (28) 県埋セ編2003「中原遺跡 第3分冊」(同埋報54)
- (29) 埋文調査センター2018年11月10日「六反ヶ丸遺跡 現地説明会資料」

(かみむら としひろ 本館学芸課学芸専門員)